

第2回総合振興計画審議会でのいただいたご意見

(令和2年12月23日開催)

赤文字…ご意見・ご提言

青文字…ご質問

○ … 担当課の回答

1 四万十町を知る取り組み

(1) 情報発信事業

【首都圏への情報発信】

■四万十町の東京オフィス通信の第1号(7月25日発行)を過去に見たことがあり、2か月後に第2号を予定しているというチラシを見たことがある。これは定期的に発行されているものか。

○令和元年度の第1号は7月25日に発行しており、2号は11月13日発行、第3号は12月25日に発行している。今年度につきましては、コロナの影響もあり、事業が思うように進んでおらず、発行していない。

■町を通じて移住者の方を紹介してもらい、直接話を聞ける体制が整っていればよいと思う。

○コロナ禍においてオンラインが多くなってきたこともあり、先輩移住者と一緒に話をすることができていない。今後はもっと生の声をお伝えできるよう努めたい。

■東京オフィスの情報発信の具体的な成果について聞きたい。

○首都圏の本町出身者に対して効果的に情報発信をすることで本町出身者の移住者に占める割合が増加した。

(2) 広報戦略策定及び情報共有促進事業

【まちの魅力の発信・広報戦略について】

■広報戦略マニュアルを役場だけでなく、民間の事業者にも使ってもらおう考えはないか。

○マニュアルの業者さん向けの配布や、ロゴについても民間の事業者に使っていたらよいよう今後進めていきたい。

■役場からのお知らせで広報誌について高校生は興味がないとの答えが65%だった。中高生に対してもまちの魅力を伝えることが必要では。また、中高生がまちづくりに参加できるような企画も検討してほしい。

○中高生にも四万十町の魅力に気づいてもらい、四万十町を好きになってもらえるような情報発信を行っていきたい。

■情報発信というのはすぐに分かりやすい成果が出るわけではないと思うが、いろんなところに波及していくものなので、非常に意義深いものだと思う。これからも継続してもらいたい。

2 四万十町を体感する取り組み

(1) 観光振興事業

【イベントの開催について】

■窪川まつりの来客数が平成30年度の実績から令和元年度の実績がかなり少なくなっているようだが、何か理由はあるか。

○おそらく天候の関係かと思わるが、詳しい分析はできていない。

■今年は、新型コロナウイルスの関係でかなり少なくなると思うが、イベントの実施の仕方について考えていることはあるか。

○桜マラソンについては、今のところ四国限定で開催するという事も聞いている。コロナの終息具合を見ながら、イベントも開催していく。

【体験型観光について】

■影野地域の住民の方が観光列車のおもてなしの取り組みをしている。観光目的でなく、単純に列車が好きの方がいるということを実感した。また、観光バスで一度に30人ぐらい来られる時もあるので、町内に長く滞在していただくことになげれたらと感じる。

○利用された方の声を聞くと、沿道で手を振ってもらうことや、歓迎していただくのはとてもうれしく思い出に残ると聞いた。そういった声を大事にしつつ、今後そういった取組についても町民の皆様に協力をお願いし、継続的な取り組みの中で、できるだけ町内にお金が落ちる仕組みを考えていきたい。

■体験型観光という周遊を含んだ事業というのは滞在時間を延ばすということで、すごくいい事業だと思うので、継続した取組をお願いしたい。

■四万十町では体験型の観光メニューは沢山あるか。

○四万十川での体験メニューについてはカヌーやラフティング、最近ではジップラインとかキャンプ場も沢山ある。そういったものをつなぎ合わせて、四万十町の周遊に繋げていきたい。

【観光資源・観光メニューづくりについて】

- 素材は沢山あると思うが、じゃあ商品はと聞かれると、まだまだ作れるものも沢山あると思うので、そういうところにも少し目を向けていただきたい。
 - どこにどんな観光資源があり、どのターゲットにどんなニーズがあるのかなど、情報を拾い上げる仕組みづくりを行って、その情報を他の地域にもフィードバックするようにすれば、他にはないような観光メニューづくりができるのではないかな。
 - 素材の良いものに、今までになかった感性をいれてあげることで、今まで気づかなかった価値に気づいたり、おもしろい取組（新たな観光資源の発掘）につながるのではないかな。
 - イベントや観光スポットのお知らせだけで終わるのでなく、そこに行って実際どんな行動ができるのか、その後こんな事もできるのか、来てもらうための提案とか、組み合わせができていない気がする。そこがすごくもったいない。
 - 四万十町でも遊びに来ていただいた時に、その中で町の自然環境に寄与するようなそういった取組があってもよいのでは。遊びに来た人からしても、町民からしてもそういったところへ意識が行くような取組が1つ欲しい。
 - もっと四万十川ありきということで思い切ったことをしていてもよいのでは。子ども達も四万十川に対してプライドを持つとか、もっと意識がいくと思う。
 - 観光振興は、一部の団体や行政だけがやることではなくて、一番住民が参加しやすいところ。PRも住民から発信していくということが効果的だと思う。また、例えば四万十町はなんでも売っているスーパーのようではなくて、専門店のようにならばその分野に特化したものを売っていくと、そういうことも必要かなと思う。
 - 窪川はよく霧が出ていていいねと言われるが、私達はそれが普通になってしまっている。もっと霧のまちということを発信してみてもどうか。
- 以前、窪川町の頃に霧のまちフォトコンテストということで実施したことがある。最近では、霧に特化した取組は実施できていないが、観光列車の話もあったように、

ちょうど影野のあたりはものすごく霧が出るところなので、観光列車の今後の取組やPRポイントとして今後の取組につなげたい。

3 四万十町に住む取り組み

(1) 移住促進推進事業

【空き家の調査と情報発信について】

■四万十町で空き家がどれくらいあるのかと、毎年空き家の数は増えているのか、また空き家の情報発信は町のホームページだけなのか、他の発信の仕方もあるのか聞きたい。

○空き家調査につきましては、平成26年度に実施しており、活用できる空き家が800戸あるということで確認している。ただ、あくまで活用できるであろうという数であり、正月やお盆に帰省するので貸せないという方が多いというのが現状。情報発信の方法は、町のホームページから移住作戦というところに入っていたか、「しあわせしまんとせいかつ」という独自のホームページ又は一番反響があるのがフェイスブックの方で情報発信をしている。

【移住者に対する支援】

■移住者にとって気になるのは、仕事だと思うが、一般的に考えて、四万十町に豊富にある仕事は農業、林業、水産業ではと思うが、町としてそういった仕事に対してどのような補助とか援助をされているのか。

○仕事に対する補助ということでは、国が進めている移住支援金というものがある。首都圏から地方に移住した場合に、単身で60万円、世帯で100万円支給されるというもの。ただし、高知県のポータルサイトに登録している事業所に就職した場合が支援の対象となる。既に住んでいる方とのバランスも考慮する必要があるため他には特にない。

【移住に対する構造的な課題】

■移住者の数の説明のところで、窪川が116人、大正が15人、十和が13人ということで、数字に差があるが、これは仕事の問題なのか、家の問題なのか。

○家の問題。窪川は民間の不動産屋さんがあるため、家も紹介ができるが、大正・十和の方はなかなか空き家がないため難しい。そのために今年度、空き家相談員を雇用し、今重点的に取組を行っている。

4 四万十町で育てる取り組み

(1) 未来塾事業

■四万十高校や窪川高校に来てもらいたいということであれば、なぜ中学校へ「じゅうく」ができないのか。十和の方は、特に高校が近くにないので、「じゅうく」自体がない。なので、関係性が薄くなってしまうので、できたら小学校からとか何か一つ枠があって、「じゅうく」との関係性作りができていけば、もう少し子ども達が2つの高校に行くこともイメージできるのではないか。

○おっしゃるとおり。来年度からは町内の中学校に対しまして、馴染みをつけていただくということで、「じゅうく」のスタッフが中学校に行くなどして魅力を伝えていきたい。

■「じゅうく」というか「未来塾」は斬新で、なかなか他の自治体ではできないと前から関心していた。その一方でなかなか、地元高校に生徒が集まらないということは、学力の面で親御さんが心配しているというのが本音のところだと思う。もちろん、高校の先生方も努力されていると思うが、高校の取組が見えてこない部分がある。

○高校の情報発信の部分については、高校自体が情報発信の苦手な方が多いと思う。町としてお手伝いさせていただいているのは、「四万十高校、窪川高校はこんなところだよ」と、生徒が自ら策定した冊子を近隣中学校に配布させていただいたり、中学生が高校の説明を聞く場というものがないために、高校の説明の場に四万十高校と窪川高校を招いてくださいということで、校長先生と一緒に営業活動をしている。実績としては、前回より4校説明する機会を増やしていただいたところ。ただ、中学生向けに周知した部分があるので、町民全体に広報ができていくのかというと、まだまだの部分があるため、次年度の反省点として高校と一緒に連携して発信していきたい。

■この間四万十高校の文化祭に娘と一緒にいったときに、学生は少ないが、少ないなりにすごく楽しそうだったという話が娘から出た。やっぱり高校生が人数は少ないけれど、楽しいんだよということをもう少し中学生にPRしてあげたら、高校の魅力がもっと伝わるのかなと感じた。

■「じゅうく」は1年生から3年生までで4割の生徒が通っているということでしたが、どれぐらいの割合で通っているのか。

○くぼかわ教室は77名中45名で、しまんと教室は58名中25名となっている。だいたい常時平均して15人ぐらいが通塾。3年生になると1学期が終わった時点で、進路状況が見えてきて退塾される方もおり、その時々によって数字は前後するが、4割から5割ぐらいで通塾いただいている。

■仕事フェスのことで、我が家も移住してきて農業をしているが、四万十町にある仕事は、農業とか林業とかじゃないかなと思うが、仕事フェスに招かれた講師の方々っていうのはそういう仕事の方ではない。どういう観点からこの方たちを招いて学生たちに仕事を紹介したのか。

○仕事フェスの講師の選考にあたって、農業、林業、漁業と第一次産業が盛んな町でありながらそのメニューが確かに入ってないと、その通りと思う。ただ、選考にあたっては町営塾のスタッフがこれまで知り合った方々や、この町にはない職業選択もあるよということをお伝えしたくて、今回はなかなか身近な職業ではないものをお知らせする形をとった。

■生姜の畑の土壌研究とか、一見地味と言われそうな仕事でもすごく魅力がある仕事だと思うので、そういうのを堂々と発信したらよいと思う。

(2) 四万十塾事業

(3) 産業振興塾事業

■農業者ネットワークの中の新規就農者は何名ぐらいいるのか。

○産業振興塾は、資料の14Pの方に農業者ネットワークということで、令和元年度44名である。新規就農者はこのうち約3分の1ぐらいだと思う。地区別の内訳は、窪川地区37名、大正地区3名、十和地区2名、中土佐町1名、黒潮町1名となっている。

【全体的なこと】

■私も3人子どもがおり、高校をどこにするか問題はかなり切実である。高校に特筆すべき特徴が見えてこないのが不安で、中学校から高知市に通わせているという親御さんは割と十和でも増え始めている。

せっかくいろんな取り組みをしているのに、その取組がつながっていないとか、何をやるにしても町への参画がすごく難しいと感じる。子供のころからそういった体験をしてないから、大人になって急にまちづくりに参加してと言われてもハードルが高い。自分が小さいころから参画した街自体には愛着は湧くし、子どももたくましく育っていく。上の世代とも横の世代ともつながりをもてる環境があればすごくうれしいし、それが海外とか他の県外の学生とかとつながりも見えたら手厚い教育が受けられているんだなと思って親としては安心して地元高校を選ぶのでは。

○おっしゃるように未来塾は未来塾、四万十塾、産業振興塾それぞれ縦割りの所もご指摘のとおりです。今、高校も新たな教育カリキュラムの導入を受け、高校の

魅力化ということで、色々な学校で取り組まれているが、窪川高校についても新たな魅力化の指針作りに来年度から取り組む予定ですが、その中で、この町営塾をはじめ、色々な人脈や、四万十塾におきましても様々な講師の方との関係もできましたので、まずはスポット的な探究学習から始め、少しずつ四万十塾、産業振興塾の魅力や持ち味を塾のスタッフとプログラムし、考えながら提供をしたいと思う。

■今回の資料作成にあたっては、忙しいとは思うが、できれば年度内に作成し、次年度にすぐ生かせるようにしてほしい。